

二十五章

一人ひとりの「生」は、

「宇宙の始まりの動き」と

呼応している。

有は物の混成にして先んじて天地生ず

有物混成先天地生

寂たり寥たり独り立ちて改らず

寂兮寥兮獨立不改

周行して殆からず

周行而不殆

もって天下の母と為すべし

可以爲天下母

われらその名を知らずこれを字して道と曰る

吾不知其名字之曰道

強いて之に名を為さんか、大と曰ん

強爲之名曰大

大は逝と曰、逝は遠と曰ん

大曰逝逝曰遠

遠は反と曰け故に道は大なり

遠曰反故道大

天は大、地は大、王また大

天大地大王亦大

域中に四大あり

域中有四大

しかして王はその一ならんや

而王居其一焉

人は地に法れば地、天に法れば天

人法地地法天天

道に法れば道、自然に法る

法道道法自然

二十六章

なにかが「重」と考えられているとき、それはじつは「重」の反対の「軽」に支えられている。

重きは軽きの根をなす

重爲輕根

静かなるは躁しきの君をなす

靜爲躁君

ここをもって「聖人は終日行くも

是以聖人終日行

その輻重を離れず

不離輻重

栄観ありといえども

雖有榮観

燕処して超然たり」と

燕處超然

いかなぞ方乗の主にして

奈何萬乘之主而

身をもって天下を軽んぜん

以身輕天下

軽がろしければ、すなわち本を失し

輕則失本

躁しければ君を失す

躁則失君

三十六章

「反」に生かされ

「反」を生かす

まさにこれを敵めんと欲せば

將欲歎之

必ずもとよりこれを張れ

必固張之

まさにこれを弱めんと欲せば

將欲弱之

必ずもとよりこれを強めよ

必固強之

まさにこれを廃せんと欲せば

將欲廢之

必ずもとよりこれを興せ

必固興之

まさにこれを奪わんと欲せば

將欲奪之

必ずもとよりこれを与えよ

必固與之

これを微明という

是謂微明

柔は剛に勝つ

柔弱勝剛強

魚は淵より脱すべからず

魚不可脱於淵

国の利器はもって人に示すべからず

國之利器不可以示人

四十五章

ほんとうに
完成しているときは
未完成に見える。

大成たいせいは欠けるが若く

大成若缺

その用弊よんぺいれず

其用不弊

大盈たいえいは沖むなしきが若く

大盈若冲

その用は翊きわまらず

其用不窮

大直たいちくは屈するが若く

大直若屈

大巧たいこうは拙せつなるが若く

大巧若拙

大弁たいべんは訥とつなるが若し

大辯若訥

躁そうは寒かんに勝れ

躁勝寒

静せいは然ねんに勝る

靜勝熱

清靜せいせいは天下の正せいを為す

清靜爲天下正